

近現代編を何か少しでも進める形にしていきたい。

一方で近世も何かの形で続いて、総合的な通史をやってもらいたいなあ。

三浦 茂一（みうら しげかず）
元千葉県史編纂室主幹。
千葉県史では近現代史部会長。千葉県史をはじめ県内の多くの市町村史も手がけており、千葉県の近代史研究の第一人者。



三 まあどこもそうですけどね。それも認めないことには作業が進まないし、本が出ないからしょうがないのだけれど。まあ妥協しながらも少しでも進めようというわけだけだね。
——話を移しまして、講座など市史編纂で得た成果を市民に還元していく活動も進めています、そうした活動について何かあればお聞かせください。

今 一番思うのは、史料閲覧の問題。今の段階では、公的な閲覧ではないですよ。閲覧ができるように、これまでの史料編にはそれぞれ目録を付けたんです。数ページにわたる場合もあって、収録史料が減るのもったいないという意見もありましたけれども、あえて最後まで付けました。その結果閲覧を希望する方が少しずつつらして。もっとどんどん来ればそれがちゃんと声にできたのにな、と。結局は公文書館的な史料の閲覧が未だにできていない。

三 見せるには、こちら側に体制がないとね。編纂自体がそれこそ本を作るのに時間をとられてしまうんだな。
今 たとえばお預かりした史料のマイクロ、あれが全部コンピューターの中に入っていれば、自分の手元にひいてきて画面でじっくり見ることができる。この手前のところまではできているんですから、そこから先ですね。収集の過程で、史料を編纂のためということでお預かりしてきたんですが、あとは差し障りのない範囲で公的な閲覧に協力していただけるようお願いして回らなければいけなかったんですけど、そこまで手が回らなかった。

三 聞いていると、やっぱりそれは文書館なんだな。これは博物館の中だけではね。今井さんの頭には文書館構想はずっとあったみたいですよ。史料編の発刊の辞にも書いてありましたね。でも未だにできていないわけですから。それも考えなきゃいかんです。

今 現実的に話を戻すと、史料の所蔵者ともう一度全部細かく連携をとる必要があります。近代になると各家の固有の史料がいろいろあるけども、近世文書がでたということで、それ以上近代分については何も触れていない家もあった。近代の産業とかそういうテーマも本当はそこから見えるはずなんです。

三 そういう調査の「ゆとり」だな。それがあれば、もっと探せばあるということ、発掘できるということですね。
今 たとえば北柏井の川口家³。あそこのお宅にはまだまだ近代分が山ほどある。業務日誌みたいなものも残っているの。限られた年代かもしれないけれど、実は一年分でもあれば、それは分析に十分値するもの。そういうのがあったけど、あれはどうなっちゃっているのかな、と。

——いずれ手をつけなければと思いながら今日まで至ってしまいました。データにしようと思っています。

今 それは絶対にすべき。
三 それで、できれば文書館もつくってほしい、と。
——結局そこにいきつきますね。ただ近現代も史料編が出る年が決まってしまっているわけだし。

三 それこそ本を作るための仕事になっちゃう。それはちょっと警戒しないといけないね。
——最後に、これからの市史編纂事業に期待することがありましたらお願いします。

今 私は近現代の史料編に大いに期待してます。特に、合併した個々の町村ね。生浜町もそうですけど、『千葉市誌』のころから全部やらないで来てしまっていますから。「なんだ生浜町これしか書いてないの」といつも言われてますけど、あの時はなにも手に入ってなかったから。
三 そういう調査もやっていかないとね。

今 もうひとつは、たとえばさっきの川口家とか、なんとかうまく一軒だけでも復元できないものか、と。
三 そういふときにはたとえば今井さんみたいなね、昔からの根付きの市民でしかも長く歴史に関わっているという、そういう人のネットワークというのを活かさせてもらわないとね。我々はまさに傭兵みたいな感じで。だから、お忙しいのはあるけれども、情報など示唆を与えてくだされば。

今 その情報なんです、生浜の方で町内会長さんが代わって、史料をNPOで預からないかという話があるんです。つまり、各町内会あたりにともまだまだあるだろうと。

三 その辺を調べるのにね、今井さんがやってあるなら…。
今 やってないんですよ、時間がなくて。あるというメモを残してきたけれども、それで帰ってきてしまっていて。
三 そういふことを聞かせてくれるとね。そうすると当局も少しは考えてくれるでしょう。
——漸次作業を進めたいと思います。本日は本当に長時間ありがとうございました。

限られた時間でしたが、編纂開始当時のようすやご苦勞、通史編の問題点、これから刊行される近現代史料編についても多くのご示唆を頂きました。史料閲覧について貴重なご意見も頂き、少しずつ実現していけたらと思います。紙幅の関係でお話すべてを掲載できないのが残念です。まだまだ続く市史編纂事業ですが、これまで携わって来られた多くの方々の努力の賜物と再認識しました。うまく引き継ぎ、更に結果を出せるよう精進して参ります。

土記』を出したでしょう。あれに僕も書くということで、それで最初の千葉市史とのつながりができたわけです。
今 あれは通史編が出て、あんなに大きい本誰も読まないということで、それで。

三 そう。それで通史を読んだわけですよ。するとだいたい『千葉市誌』が下敷きで、それ以上は何もないような感じにみえましたね。ちょっと新しいようなことは、だいたい『千葉県史』で。二つを組み合わせ、それで『千葉市史』。本当にこれでいいのかなという印象で、その後編纂委員として参加したんです。その時は今井さん中心に史料編をみっちりやっている時なんで、まあこれは出る幕もないし、やることも無いし、という感じ。だから今ね、新しく近現代が始まるということだけど、それと同時に本当は近世も何かの形で続いて、総合的な通史をやってもらえるといいなと思います。近現代編について具体的に考え始めたのは、今井さんの後、麻生さんのころ。あの時は今井さんもいたんだよね？

今 ええ、そうです。
三 職員が一人ではちょっと心細かった。まだ史料編は刊行が続いているわけだから、いつになったらできるだろうなあ。少し具体的に市史として活動を始めたのはその頃ですよ。

今 郷土博物館へ来てから近世の方でも『堀割』²とかが入ってきました。その調査が必要でしたが、専ら私は留守番で直近の作業を進めて、調査成果を少しずつ積み上げていくのは麻生さんや龍崎さんにお任せして。

三 なにしろ、事務局が昔から人数が足らんということですね。
今 そうですね。いつになっても。

三 近世や近現代を同時に進めるというためには、やっぱり事務局がいないとできませんから。ところで、市史で収集した史料というのは、近現代の関係もかなりあるわけでしょう？

——市内の家文書で近現代の分があるものもあります。役所の中のものも勿論です。

三 近現代の史料調査となると、さしあたり市内でまだ調査すべきもの、調査すれば出てきて整理すべきものとか、そういうものがある可能性はありますか？

今 あります。のみならず役所の分が。それは先生に編纂組織の件でお願いにあがった時にも言われましたが、あのころはまだ役所のガードがどこも固い時で。

千葉市史の「いまむかし」

千葉県史編纂40周年記念対談

千葉県史編集委員会委員長

三浦 茂一

千葉県史編纂会議委員

今井 公子

千葉市史編纂40周年という節目の年、今後の展望を考える意味で、千葉市史編集委員会委員長の三浦茂一氏と、千葉市史編纂会議委員の今井公子氏にお話を伺いました。
——まずはこれまで編纂事業に携わって来られたお二人の今のご感想をお聞かせください。

今井 正直やり残したこともあるというのが実感。問題のまっただ中で私は代わることになったという状態だった。編纂の体制も非常に厳しい状態の現今なので、今後は大変だなあという感じ。なんらかの支援ができればいいなあとは思いますが、実際にはとても手が回らない状況。

三浦 僕は途中からだから、事実をあまり知らないのだけれど。編纂室は郷土博物館に最初からありましたっけ？

今 初めは教育長室にあって。昭和58年度から郷土博物館にかわりました。

三 そういう編纂室の変遷というのもあるね。これは人数的に増えたとかそういうことでなくて？

今 二人で全部かついでここへ来ました(笑)。

三 その辺は僕は知らないから。近世の史料編をやったので、会議のときだけ来るという感じ。何で委員に入っているのかな、と。会議になると今井さんが事務局の説明をして川村さん¹が何か言って、ぐらいいしか覚えてないなあ。

今 でも、最初から近代をどうするかはすぐ問題だったんですよ。古いところから近世ぐらいまでは、旧『千葉県史』でもやってあるので、それを参考にしてこうしよう、と進めていましたけど。

三 僕は会議に来ててもやることが無いなあという感じで。ただこれでいいのかな、という感じは持っていましたよ。毎年本が出せない状況でしたものね。

今 予算はとっていたので、本当は毎年出そうと思えば出せたんですよ。けれど原稿が出来上がらないでしょ？それとこっちの史料調査が追いつかない。両方あって…。その後も予算はつクのだけれど、整理作業が終わらないとかで段々滞ってきてしまって。

三 史料編を出すようになってからかなりちゃんとやっているな、という感じを僕は持ち始めたんです。それまでは通史の近現代にしても、史料の無いところで果たしてこういうのを書いていいのかな、という印象でした。今井さんも書いたと思うんだけど、千葉日報で『千葉市風

今井 公子（いまい きみこ）
NPO法人ちば・生浜歴史調査会理事長。
元千葉市史編纂担当者。専攻は考古学だが、千葉市史の編纂開始当初より編纂業務に携わっており、地方文書や民俗資料にも関わっている。

*1 川村優：千葉市史編集委員会前副委員長。近世史担当。

*2 『天保期の印旛沼堀割普請』平成10年発刊。

*3 花見川区柏井町川口貴雄家文書。当館寄託。

やり残したこともあるというのが実感。

非常に厳しい状態の現今なので、今後は大変だなあという感じ。

